

もしかしたら、周りの人は気になってるかも。

ふるさとのご飯を 大竹市民 みんなで守ろう。

新型コロナウイルス感染症対策飲食店応援プロジェクト

おおたけマナーアップ3ヶ条

Otake manners improvement section 3

- マナーアップ其の一 無理はやめよう。**
咳が出る、熱があるかもしれない、無理をして行くのではなく一人ひとりが気をつけてお店に持ち込まないようにしよう。
- マナーアップ其の二 消毒をしよう。**
お店に入る時はアルコール消毒又は手洗いをしっかりして安心してお店を利用しよう。
- マナーアップ其の三 飛沫感染を防ごう。**
飲食の際、会話をする時にはこまめにマスクを着用する事で飛沫感染を防ごう。

大竹市 大竹市料飲同業組合
大竹青年会議所シニアクラブ 一般社団法人大竹青年会議所
大竹商工会議所 大竹商工会議所青年部

飲食応援プロジェクトとして、ポスターを作り、市内各所に貼りました。

【取材 企画財政課】
いまだ新型コロナウイルス感染症の収束の兆しは見えてきません。会食による感染拡大が懸念されると言われ、飲食業界は大きな打撃を受け、苦しい経営状況が続いています。昨年6月号では、飲食のテイクアウト普及のため『おおたけテイクアウト』の取り組みを紹介しましたが、今月号は、市内の飲食店の現状を伝えるとともに、商工会議所や各種団体、企業の新たな取り組みと、応援の声を届けます。



NO COVID-19

コロナ禍と関わり 感染症 VS 飲食業

宮島ボートが県と尾道市に 新型コロナウイルス感染症対策として 総額1億6千万円寄付



湯崎広島県知事(右)に寄付目録を手渡す松本市長(中央)と入山市長(左)。

大竹市、廿日市市で運営している宮島ボートレース企業団は、新型コロナウイルス感染症への対策として、県と、新たに場外券売り場のできた尾道市に総額1億6千万円を寄付しました。
企業長の松本廿日市市長と副企業長の入山市長は、2月1日に県庁を訪問し湯崎知事に寄付目録を届けました。
広島県 1億5千万円
尾道市 1千万円



①出土したかめや茶わんなども展示。②晴海入口交差点付近には、築城時の姿を遺す石垣。石垣のそばには、旧西国街道の跡もありました。③小方2丁目JRガード付近から発掘された石。当時の刻印も見られます。



姿を現す亀居城の石垣
小方1丁目・2丁目
岩国大竹道路の建設工事が進む中、小方地区で行われた第3次の発掘調査で、亀居城関連遺跡とみられる石垣などが出土。県教育事業団の埋蔵文化財調査室と市教育委員会が見学会を午前、午後の2回開催し、市内外から65人の参加がありました。
大きく掘られた土の中には、姿を現した1600年代初頭の築城時のものと思われる石垣が連なり、参加者は埋蔵文化財調査室の渡辺昭人主任調査研究員の解説に耳を傾けていました。
午前の回に参加した青木謙一郎さん(西栄3)は、「幕末に興味があるのですが、1866年の長州との戦いで火災の痕跡があったという説明が聞けてよかったです。見学会に満足した様子でした。」

北方領土返還を訴える

大竹駅前商店街

2月7日は、『北方領土の日』。北方領土問題への国民の関心と理解を深めるために制定されたもので、1855年に江戸幕府とロシアとの間で日露和親条約が結ばれた日です。

『北方領土の日』に先立ち、大竹駅周辺や駅前商店街で、青年会議所のメンバーが啓発活動を行い、市民に北方領土返還の意義を訴えました。



北方四島の返還運動の機運を盛り上げるため、駅前商店街で青年会議所のメンバーがキャンペーン。

相次ぐ忘年会キャンセル

「客足は冷え込んでますね。」
そう言葉を漏らすのは、食堂、
喫茶店、居酒屋、仕出し、
と、大竹駅前で飲食の多角経
営をしている山口貴宏さん。
新型コロナウイルスの影響を
受けた一人だ。マスクと三角
巾の間からわずかにのぞく目
に、飲食店の置かれた厳しい
状況が見え隠れする。

大竹市は、感染者数は多く
はなかったものの、近隣の
感染者の多発による影響は決
して小さくない。昨年春から
の第一波、続く第二波を乗り
越え、ようやく客足も戻りか
けた矢先、年末からの感染者
急増のため、再び苦境に立た
されることになった。

折しも忘年会シーズンを迎
え、客足が戻ると期待してい
た居酒屋は、企業などの団体
のキャンセルが相次いだ。

「会社などの宴会は無くなり
ましたね。それと広島方面に
動いている人も、広島市内で
感染者が増えてくると、なか
なか大竹に帰ってから飲もう
という気にならないみたいで
す。」

食堂の2階の喫茶店も以前



コロナ禍をどう乗り切るか

苦境に立ち向かう飲食店
山口 貴宏さん

『おおたけグルメまっぷ』で、 飲食店をバックアップ

大竹商工会議所 柳原 宏昭さん
田宮 絢子さん

「昨」年の11月20日ごろだった
でしようか、広島でコロ
ナの感染者が増えたのを境
に、お客さんが全然来なく
なると、飲食関係の人たち
から一斉に連絡が入りまし
た。」

忘年会が軒並みキャンセル
になったという事態を振り返
るのは、商工会議所の柳原宏
昭さん。年明けからは、営業
時間を短縮する店舗があるな
ど、依然厳しい状況は続いて
いるという。

新型コロナウイルスが猛威
をふるい、飲食店が打撃を受
けた春先から初夏にかけて、
第一弾の取り組みとして、『お
おたけテイクアウト』のキャ
ンペーンを行った。商工会議



『おおたけグルメまっぷ』を
手にする田宮さん。表紙イ
ラストは、地元のイラスト
レーターによるもの。

コロナ禍と闘う 感染症VS飲食業

「コ」ロナの感染状況が落ち着
きをみせたタイミング
で、テイクアウトをしている
店以外も紹介したいと考えて
いました」と柳原さん。次の
一手として、実際にお客さん
に店に足を運んでもらうた
め、グルメマップを作ろうと、
10月から掲載店の募集を始め
た。コロナの状況は、見込み
どおりにはいかないものの、
収束後を見据えてやれること
はやるという姿勢だ。現在、
商工会議所は、3月の発行に
向けて『おおたけグルメまっ
ぷ』という冊子の発行準備を

所、青年会議所、市が協力し
て、パンフレットの発行やS
NSで、テイクアウト情報を
発信してきた。

進めている。

「前に作ったパンフレット
では、20店舗くらいの紹介で
したが、この冊子では商工会
議所の会員以外の店舗も掲載
しています。約70店舗を、和
食・食堂、洋食・レストラン、
居酒屋、仕出し」のよう
に分類して、探しやすいこと
をみました。冊子は市内全戸に
配る予定です。」

併せてSNSの役割も重要
視している。

「インスタグラムは1投稿
で1500回程度見られてお
り、年齢層も若いと思われま
す。冊子の掲載店舗を順番に
紹介していきたい」。その効
果も期待している。

「飲食店支援はもちろんの
こと、他の業種もコロナの影
響を受けています。とりわけ
小売店は影響が大きいにも関
わらず、なかなか支援策が無
いとの声があります。それら
の店にお客さんを呼び込むた
めの企画を考えていきたい」。
個人的な思いだと前置きをし
ながらも、今後の取り組みに
意欲を見せている。

とは異なる状況となっている。
元々喫茶店は、コーヒーを飲
みながら、会話を楽しむとい
うお客さんが多いのだが、そ
ういった機会もめっきり減っ
たようだと言っている。

「感染症対策として、できる
限りのことはやったつもりで
す。食堂でも席を減らしたり、
個人スペースになるようスク
リーンカーテンを付けたりし
ました。アクリル板の設置や
店内洗浄も行っています。食
事の際にマスクをしまうマ
スクケースのサービスも始め
ました。これはお客さんの評
判も上々でした。」

コイちゃん効果あり

こうした苦しい状況の中
で昨年秋に発行した『コイ
ちゃんクーポン』など一連の
事業を評価する。
「クーポン発行事業には、
本当に感謝しています。クー
ポン券を中小の店舗と大手の
店舗で使えるものを分けて
くれたのも良かった。千円分
の飲食で500円の割引が

あるので、お客さんも千円に
なるように注文してくれてい
ました。地域内で使えるとい
うのも、人の移動に不安を感
じる皆さんも安心できたので
はないでしょうか。今は店と
してお客さんに還元するのは
難しい状況です。コイちゃん
クーポンのほかにもペイペイ
とのキャッシュレス推進事業
など、市がやってくれたこと
で本当に助かりました。」

地域の消費喚起のための効
果を実感したという。

「テイクアウト文化が根付い
てきたと感じています。テイ
クアウト専門で利用してくれ
る新規のお客さんも増えてま
した。今は、ごはん付きのテイ
クアウト料理ですが、ごはん
は家で炊くという方もいらっ
しゃるので、今後はおかずや
総菜が、お持ち帰りできるよ
うなものも始めたい。」

そんな新たな試みも考えて
いるようだ。
1日1回の更新を心掛ける
というインスタグラムで、積
極的に情報発信に努める山口
さん。昨年夏に他界した父親
ならコロナ禍をどう乗り切っ
ただろうかと、自分自身に問
いかけているという。

コロナで苦しむ 飲食店を応援 800食の テイクアウト

株式会社ダイセル
大竹工場



「地域貢献になれば」と
堀さん(左)と宗兼さん(右)

約500人の従業員が働く
株式会社ダイセル大竹工
場。今回、福利厚生事業の一
環として、地域の飲食店に弁
当を頼んでいるそうで、大竹
工場総務部の堀貴俊さんと
労働組合の宗兼史樹さんに取
り組み内容を伺った。

「例年であれば福利厚生事
業として、夏祭りなどのイベ
ントを開催していました。し
かし、昨年はコロナの影響で
中止となってしまいました」
と堀さん。

代わりに何かできないか
と、労働組合側と協議する中
で、いくつかの取り組みを考
えた。その一つとして実現し
たのが、地域の飲食店への応
援を兼ねて、従業員の弁当を
注文するというもの。

「弁当にしようと思った
きっかけは、『おおたけテイ

クアウト』のサイトを見たこ
とがヒントでした。宗兼さ
んは振り返る。

「大竹工場、それにグルー
プ企業の従業員300人を合
わせた800食の弁当を2月
24日から3月5日の間に、1
日約100食、それを8日に
分けて発注することにしまし
た。予算に合わせてメニュー
内容をプラスしてもらうこと
もありました」と堀さん。

これらの条件に対応できる
業者を商工会議所に紹介して
もらい、4つの飲食店にお願
いすることになった。

「従業員に対して還元とい
う意味もありますが、地元の
企業として地域のために何か
できないかという思いで取り
組みました」。堀さん、宗兼
さんは口をそろえた。